

役行者大銅像

この立像は1951年、役行者の1250年遠忌の記念に建立されました。役行者は修験道の開祖で、7世紀の人物です。通常、役行者のお姿は岩に腰かけているのが普通ですが、これは立って前方を見ている珍しい像です。

日本霊異記（にほんりょういき）という説話集によると、修験道の開祖である役行者は、奈良の御所（ごぜ）地域で生まれました。役行者は幼いころから山に強い興味を持ち、葛城山の山林で修行を始めました。自らを修行の道に捧げた役行者は、広く旅をしながら人生を送り、日本中の数々の霊峰に登って、金峯山寺や大峰山の大峰山寺などの修験道の聖域を開きました。

役行者について、数多くの伝説が残されています。伝説のひとつは、母を鉄鉢に乗せて五色の雲に乗って昇天しました。別の伝説では、前鬼と後鬼という名の二匹の鬼を捉え調伏したとされています。この鬼たちは、その後、役行者に仕え、命令に従ったということです。役行者を描写した作品のほとんどで、前鬼と後鬼を従えています。